

# 五月の風

## 大後美保

五月にはいるとまもなく立夏で、気候は春から初夏へと移り変わる。四月には強い風が吹いたが、五月に入ると発達した移動性高気圧や帯状高気圧におおわれることが多くなり、風の静かな五月晴れがよく見られるようになる。気候が暖かくなるので吹く風にも寒さをおぼえず、青葉が茂り、そこを吹き渡って来る風には清爽な心地よさを感じ、まさに薫風の季節となる。

薫風やいと大いなる岩一つ 万太郎  
薫風は移動性高気圧の中心が通り過ぎた後面や、またその後から低気圧が東進

してくる前面などでも吹くことがよくある。しかし発達した低気圧が西の方から接近して来る時や、日本海を通る時には風が強くなり、薫風ではなく青嵐となる。嵐に青とつけたのは青葉の頃に吹く強い風であるからだ。

青嵐一蝶飛んで矢より迅し 虚子  
風がかなり強くても五月に入ると関東以西では風に寒さをあまり感じないようになる。  
五月の風が四月の風に比べて肌ざわりがどことなく心地よいのは一つには湿度がちがうからである。太平洋沿岸地方で

は四月の風より五月の風のほうがならして湿度が4%以上も高い。湿度が高いと洗濯物など乾きにくい、四月より五月のほうが日射が強くなるので、その影響はそれほどマイナスとはならない。一方日本海沿岸地方では、太平洋の方から吹いて来た湿った南風が中央山脈を吹き越すさいにフェーン現象を受けて乾燥した暖かいフェーン風となる。この南風には太平洋沿岸地方の人々が感じる薫風とは別の感じでこの風に初夏の訪れをおぼえるであろう。

とくに北陸地方では「南風は馬鹿風でやむことを知らない」ということがいわれる。中央山脈を乗り越えて北陸地方に南風が吹くような時には、低気圧が日本海の沖を通りすぎるまでは昼夜を通じて強い南風が何日も吹き続くからである。こうした時にはとくに非常に乾燥するの

で火災に気をつけねばならない。

同じ五月の風でも高原、平野、海岸で、また農村と都会では受ける感じがちがう。

都会では緑が少なく薫風といいがたいが、それでも肌で感じた風合に初夏の訪れを感じる。都会には高層建設物が多いので場所により風の吹きかたがまちまちである。上層では南風でも下層の道路風は東風や西風になっているところもある。都会の風が乱れていることは、鯉鱈がそれぞれまちまちな方向に薫風や青風で流れているのを見てもわかる。そのうえ、建て込んだ住宅街では青風のさいの風車の音がかかる。

いわゆる薫風は弱い南風のことが多いがこの風がやや強い時には西の方から低気圧が近づいて来る時であるからやがて雨となることが多い。それで昔から「南

風は雨近し」「南風は雨を運ぶ」などといわれる。

五月前半は五月晴れといい晴天が比較的多く、そのうえ日射が強くなるので山谷風、海陸風、湖風、河風などの局地風がめだつようになる。日中海岸に立つと海の方からそよそよと吹いて来る風があり、また山麓地方では夜間に山から吹きおろしてくる山風に寒さを覚えることがある。こうした局地風は昼夜によって風向が反対になる。そのために、海に沿う都会では、汚染した空気が昼間は内陸に吹き寄せられ、夜間は海上に吹き出されることとなる。

五月も半ばを過ぎると、梅雨の走りが見られ、また台風が近くを通ることがよくあるので晴天が少なくなる。天気図を見て台風が日本の方へ近づいている時には今までとちがって蒸し暑い風が吹く。

こうした風には台風の襲来を警戒しなければならぬ。

また年によってはオホーツク海高気圧の勢力が強くなることもある。このような時には北海道や東北地方ではやませと呼ばれる北東風や東風が吹き、この風は山を乗り越えて日本海沿岸地方にも冷気をもたらず。この風は薫風どころか寒さをもってきて、農作物の冷害の原因となるが、一方昔は船乗りには順風として歓迎されていた。やませは連続四日以上長く吹くと急に気温が低くなる。それで「七日やませ」といわれる。

このように同じ五月でも吹く風は地方によりちがうが、いわゆる薫風は一年のうちで最も心地よい風といえよう。秋の風にはどこか哀愁をおぼえるが、五月の薫風には生きることの喜びを感じる。

(成蹊大学)